

# 打囃子

うちばやし

10月2日、鎮守の森に囲まれた曾木神社の境内。秋空に澄み渡る囃子の演奏に、子どもたちが自然に加わる。  
曾木町の打囃子は、今から約350年前に愛知県岡崎方面から伝わったといわれている。演奏に使われるのは、竹笛や太鼓といった素朴な楽器。夏の夜祭りのほか、水不足の時の雨ごいでも欠くことのできない音楽として、地域の農民に親しまれてきた。現在では主に曾木神社の秋の例大祭でその音色を聞くことができる。  
祖先から代々受け継がれてきた打囃子だが、後継者不足の問題もある。曾木小学校では4年生以上の子どもたちが、保存会の方から指導を受けて演奏に取り組んでいる。地域に残る貴重な文化。関係者の尽力と、子どもたちが自然に親しむことで、これからも守り伝えられる。



太鼓を演奏する横地詩依さん(9歳)。「太鼓のいい音が好き。演奏は隣に住むお兄さんを見て覚えた。これからも続けたい」と教えてくれた。



土岐市打囃子保存会会長の中嶋勝郎さん。「(打囃子は)楽譜がないので、耳で聞いて演奏を伝えていかないと、後世に残すことができません」と後継者不足を心配している。



打囃子の演奏で使用される楽器。竹笛、大太鼓・小太鼓、拍子木など。太鼓は皮を張り替えながら代々受け継いできた。一番古いものは明治時代のももの。



# 流鎗馬

やぶさめ

民俗芸能として市の無形文化財に指定されている、妻木町八幡神社の流鎗馬と曾木町の打囃子。  
八幡神社の流鎗馬は、元和9年(1623年)、初代妻木城主妻木家頼が、神社に一頭の馬を献上したことが始まりだといわれている。明治3年に一旦廃絶するが同14年に再興され、現在まで受け継がれてきた。10月9日、朝霧が輝く静かな境内に馬のいななきが響く。流鎗馬の騎手(乗子)を務めるのは妻木町の小学4、6年生の男子6人。前夜から神事を行い、神社で過ごす7月から乗馬の練習をしてきた乗子たち。陣笠陣羽織の流鎗馬の衣装に身を包むと、一気に緊張感を漂わせはじめた。いよいよ馬乗りの時だ。  
「ホーイー」。乗子たちが掛け声を上げながら参道を駆け上るたび、観客から万雷の拍手が送られていた。



土岐市流鎗馬行事保存会会長の三輪洋二さん。「毎年盛大に行われる流鎗馬は妻木の誇り。大勢の関係者の努力、影で支える力によって守られてきた。これからもこの伝統行事を守っていかねければならない」と決意を語る。



- ① 6時30分、本殿で祝詞を奏上。流鎗馬の奉納のため、早朝から喉抜や禊ぎ、百度詣りの神事を行う。
- ② 馬上から行う弓を射る儀式
- ③ 花笠と鮮やかな五色の布を身にまとった古式衣装姿。おしろいを塗り、紅を差した表情は、一層凛々しい。

